

経営に気づきと新たな価値を

2021 | 9

先見経済

清話会セミナー 講演録

日本貿易振興機構
(ジェトロ)
ヨハネスブルク事務所長
及びアフリカ総代表

石原 圭昭

アフリカのビジネス概観と
南アフリカの今後の可能性
— 日本から進出している企業と、
今後伸びそうな分野

小島 健一

発達障害の傾向のある人を雇用したら
(応用編)
— 発達障害傾向のある社員と
どうコミュニケーションを取り、戦力化するか

鳥飼総合法律事務所・
パートナー弁護士

朱 建栄

米中の政治・経済問題と日本の立場
— マスコミが煽る情報を
冷静に読むと見える事の本質

東洋学園大学教授



1



清話会リモートセミナー講演 講演録
アフリカのビジネス概観と
南アフリカの今後の可能性
——日本から進出している企業と、今後伸びそうな分野
日本貿易振興機構(ジェトロ)ヨハネスブルグ事務所長及びアフリカ総代表 石原 圭昭

新連載

7



粕取焼酎と近江商人
循環型社会で甦る“粕取焼酎”
琉球大学国際地域創造学部非常勤講師
沖縄国際大学経済学部特別研究員 田崎 聡

8



「失われた30年」からの脱却企業の持続性を高める新提案
中小M&A支援機関の登録制度制定から
一般社団法人ネクストブレナー協会 代表理事
Growthix Capital株式会社 取締役CFO 河本 和真

集中連載

10



なぜ、会社がうまく回らないのか?
経営理念を現場で活かす方法
マイスター・コンサルタンツ株式会社
代表主席コンサルタント 小池 浩二

12



清話会セミナー 講演録
発達障害の傾向のある人を雇用したら(応用編)
——発達障害傾向のある社員とどうコミュニ
ケーションを取り、戦力化するか
鳥飼総合法律事務所・パートナー弁護士 小島 健一

19



体育会人材・若者採用のススメ
体育会人材の就職観
株式会社アーシャルデザイン
専務取締役/COO 久野晋一郎

20



ニューノーマル時代の礎を築く
SDGsの基本とビジネスへの関わり⑧
フィルゲート株式会社 代表取締役社長
青山学院Hicon主幹研究員 菊原 政信

22



中堅・中小企業のプレイングマネージャーの仕事術メソッド
リーダーのリーディングスタイル
マイスター・コンサルタンツ株式会社
代表主席コンサルタント 小池 浩二

24



特別リモート講演 講演録
米中の政治・経済問題と日本の立場
——マスコミが煽る情報を冷静に読むと見える事の本質
東洋学園大学教授 朱 建榮

30



「算命学が教える宿命」と「天命」
本質を活かすとは、宿命を生きること
算命学占術師
ソウルヒーリングセラピスト あさひ天麗

31



SENKEN TIMES
平成事件簿
志布志事件
ジャーナリスト 三沢 明彦

32



100歳現役を目指す!
身体を温めて免疫力アップの最新健康メソッド
がんの治療法 放射線治療編
株式会社MOZU メディカル事業部責任者 鈴木 健人

34



SENKEN TIMES
ジャーナリストティックなやさしい未来
お金をどう使うか、で問われる人生の真価
みんなの大学 学長 引地 達也

特別寄稿

35



SENKEN TIMES
論議が産み出す新たな活力
株式会社HOPE 代表取締役 澤田 良雄

36

SENKEN TIMES 【書評】
『古くて素敵なクラシック・レコードたち』
(村上春樹著)
評者 清話会代表取締役 佐々木俊弥

37



特別オンライン講演会のお知らせ
感染力の強いデルタ株はワクチン接種で抑え込めるのか
——まだまだ予断を許さない新型コロナの今後の見通し
東邦大学 医学部 微生物・感染症学講座 教授 舘田 一博

本誌に対するご意見・ご感想を募集しております。
郵送(編集部宛) /
FAX (03-6811-7291) /
Eメール (info@seiwakai.com)
のいずれかでお寄せください。

発行人 佐々木俊弥
DTP 日本ハイコム株式会社

「先見経済」
Webサイトのご案内

清話会会員※の皆さまは、オフィスのパソコンや出先のスマホで、雑誌「先見経済」の人気連載を年会費のみで購読できます!

※法人会員、正会員、購読会員が対象となります。セミナー会員の皆さまの購読は有料となります。

先見経済Web 検索 <http://senkenkeizai.com/>

会員ログイン

ユーザー名

seiwakai

パスワード

senken2021

入力して

ログインをクリック!!

ログイン状態を保存

※パスワードを変更しました。ご注意ください。

粕取焼酎 と 近江商人

第一回 循環型社会で甦る 「粕取焼酎」

「粕取焼酎」いや、「カストリ焼酎」と聞けば、昭和の団塊世代以上の年代の男性にはなじみがあるかもしれないが、現代の若者はほとんど「聞いたことがない」「飲んだこともない」と答えるであろう。粕取焼酎は、それほど知られていない焼酎であることは確かだ。

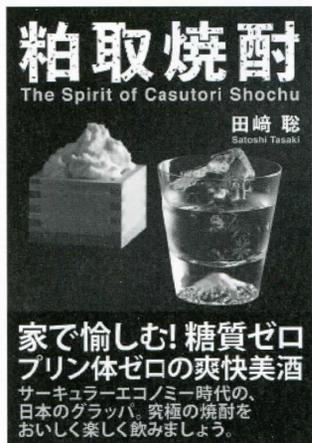
昭和の戦後の物資の乏しかった日本では「闇市」が横行、その時に出荷していた粗悪な密造酒を俗称として『カストリ』と呼んでいた時期があった。これは、当時流行したエログロナンセンスな低俗な雑誌を「カストリ雑誌」と呼んでいたことから、これとカストリ焼酎と混同させて呼ばれてしまった汚名があり、年配の人の中には未だにそのマイナスなイメージを引きづっている人も多いのが事実だ(写真①)。



写真① 闇市でのカストリ酒場の風景

しかし、現代の飲食を牽引する年代の層は、全くその記憶は持っていないので、あえて「粕取焼酎」と呼び、新たな焼酎需要を喚起していきたいと考え、私は今年、拙著『粕取焼酎』を出版、発刊することとした。(写真②)

さて、最近よく「サーキュラーエコノミー」(循環型経済)や「SDGs」(持続可能な社会)という言葉が耳にし、すでに実践している企業や個人も多いだろう。「廃棄」されて



写真② 「粕取焼酎」田崎聡著
発行/楽園計画 発売/星雲社

いた製品や原材料などを新たな「資源」として捉え、廃棄物を出すことなく資源を循環させる経済の仕組みのことを「サーキュラーエコノミー」と言うが、元来、日本ではすでに江戸時代に完成させていた経済の仕組みだったわけである。それが、後に日本は明治維新以降の欧米型近代経済至上主義に邁進、その結果、企業や消費者はインスタントな使い捨ての食文化を奨励し、大量生産、大量消費の莫大なゴミ消費社会を造ってきてしまったのが現実である。

そうした反省も踏まえて、人々はまだ一度食と農を見直す「地産地消」や「身土不二」、「スローフード」や「テロワール」といった概念や活動を取り入れ、「フードロス」を極力起こさないように「持続可能な循環型社会」をようやく構築しようとし始めている。

そんな中、今また「粕取焼酎」がサーキュラーエコノミーの観点から注目されているのである。日本では、江戸時代の焼酎は琉球や薩摩などを除けば、ほとんどが「日本酒蔵の粕取焼酎だった」と言われている。日本酒を醸造した後に出る酒粕を、さらに蒸留して焼酎にし、その焼酎粕を「下粕」として稲作や畑作の肥料にし、米づくりを行って日本酒を造り、その酒粕で焼酎を造る、といった循環型農村経済システムを江戸時代にすでに構築していたのである。

さて、その粕取焼酎の蒸留技術は、江戸初期に九州北部から全国へ広がったと言われている。その伝播ルートの実証は謎のままであるが、近江商人が北前船ルートで伝播した可能性が高い。粕取焼酎は、大宰府天満宮を中心に全国の天満宮の神領田、山口県防府天満宮、京都市北野天満宮などで広がったと言われており、農学者の宮崎安貞が「農業全書」(1697年)の中でその製法を広めたと伝えている。その製法とは「打ち水をして数カ月熟成させた酒粕に粃殻を混ぜ、固体醪に蒸気を通すことによってアルコール分を抽出するというもの」で、中国の白酒(パイチュウ)に近い造り方である。 **先**

田崎 聡 (たさき さとし)

一般社団法人食の風/アジア食文化交流協会/沖縄コーヒー協会 代表理事/6次産業化プランナー/食農連携コーディネーター

武蔵野美術大学卒後、1986年に東京から沖縄移住。数々の飲食店をプロデュース。雑誌「沖縄スタイル」などの創刊編集長を経て雑誌・出版・編集プロデュース、移住支援、食と農のコンサルティング等を行う。琉球大学国際地域創造学部非常勤講師、沖縄国際大学経済学部特別研究員。



【書評】

『古くて素敵なクラシック・レコードたち』

村上春樹著

発行：文藝春秋(2021年6月24日)



■この書籍は、氏が膨大に有する主にLP(ごくたまにSPも)のコレクションの中で、約100曲に及ぶクラシックの作品につき、それぞれに3、4枚(時にはもっと)の違う演奏家による盤を並べて、聴き比べた印象、感想が、淡々と書き綴られていて、これまでの村上氏の書籍：小説やエッセイ、対談本と一線を画するような内容になっています。

名演奏、名盤の紹介、という力の入ったものでもなく、たまたま安価で買ったLPが思わぬ拾い物だった(100円で買ったとか、1ドルで買ったという付記がしばしばあります)とか、ジャケットに惹かれて買ったら演奏もよかったというものまで、とても肩の力の抜けた内容になっています。盤1枚につき実に短いコメントが沢山並んでいます、それぞれの簡潔な的を射た聴き所のツボの押さえ方はさすがです。

■本のタイトルにあるように、どれもが古い(せいぜい1970年代くらいまでの)演奏家による盤で埋め尽くされています。筆者も多少、クラシック音楽を聴きますが、この本に名前が出てくる演奏家たちの多くは名前しか知らない、あるいは初めて耳にする演奏家ばかりです。

その、古い演奏家たちによる古い演奏が、今そこにある名演として、生き生きと語られる。新しい、若い演奏家による演奏が次々と発表されますが、クラシック音楽に限らずどのジャンルにも押さえておくべき、あるいは知っておくと心が豊かになりそうな過去の作品や演奏は必ずあるはずで。

■思えば、筆者もクラシック音楽を聴き始めの頃は、吉田秀和氏や他の評論家による名盤・名演奏の批評を読みながら、機会を見つけてはLPやFM放送で実際に聴いてみて、徐々に自分なりのクラシック音楽へのスタンス、好みを見つけていきました。

クラシック音楽の初心者が、この村上氏の本を読んで、

クラシックの奥深い魅力に入り込んでいくきっかけになるかどうかは分かりませんが、好事家にありがちな主張や押しがなく、淡々と馴染みの演奏にコメントを述べているこの本は、ある意味新鮮です。

■それにしても、村上氏のバランス感覚というのか、一つの曲を好き嫌いはいったん置いておいて、様々な演奏で聴いて、それぞれなりのツボや特徴を見出していく。この感覚は村上氏の小説の主人公のバランス感覚にどこか通じている気がします。曲も、演奏家も、実に幅広く聴いて、好悪で選別せずに、それぞれなりの特徴を見出して受け入れる。これはまさしく、氏の小説作品の語り手や主人公そのものです。

村上春樹氏の小説の語り手や主人公も、自分の好き嫌いで周りの人たちを選別せずに、等しく好意的に受け入れていく。それが、読んでいる私たちにも安心感と心地よさを与える。しかしそれゆえに、主人公の周りには色々な人が集まってきて、時に不思議な世界へと誘われていきます。

■筆者が馴染みのクラシック音楽を聴くときは、「この曲はこの奏者による演奏に限る」とほぼ決めてしまって、そこから抜け出せないというのが正直なところ。例えば、反対意見はあると思いますが、ベートーヴェンの「熱情」ソナタはグレン・グールドの演奏以外考えられないとか、サティの一連のピアノ曲はラインベルト・デレーウの演奏しか心に響かないとか、バッハの管弦楽組曲第2番はヘルムート・コッホ指揮ベルリン室内管弦楽団に勝る演奏に出会ったことがないとか……。

■今は、YouTubeで古今の色々な演奏がけっこう聴けてしまう時代です。慌ただしい日々であって、この本を頼りに、ゆっくりとクラシック音楽を「聴き比べる」楽しみの時間を見つけていきたいものだ、とつくづく思われます。(佐々木俊弥 清話会代表取締役) 先